

マックス・ホルクハイマーと反ユダヤ主義

井 上 純 一

1 ユダヤ人として 家族の中で

20世紀ユダヤ学の泰斗、ショーレム（Gershom Sholem）は、自叙伝『ベルリンからエルサレムへ』の中で、ホルクハイマーの率いるフランクフルト社会研究所が、ドイツ系ユダヤ人が創った最も注目すべき「ユダヤ人セクト」の一つだと語っている。ショーレムはベンヤミンの親しい友人でもあった。そして社会研究所のメンバーの殆どが、ミドルもしくはアッパーミドル階級のユダヤ人家系の出自であったことは知られている。

フランス革命以来、ヨーロッパにおいて、同化ユダヤ人が優れた科学上、哲学上の業績や社会的成果を積んできたことは、周知の事実である。彼等には、概ね自らをヨーロッパ文化へ完全に吸引させることをめざして、二つのタイプが存在していた。その一つは、既存の社会的秩序にトータルに同化する方向、もう一つは、知的批判をもった同化、すなわち自らの理念をもって社会秩序を裁断する同化である。しかしそのどちらにしても「ユダヤ人はドイツ人民に同化したのではなく、ドイツ人民のある層、即ち新たに登場した中産階級に同化した」（Jacob Katz）といわれるように、フランクフルト学派のメンバーもまた、程度の違いはあれ、その流れの中にあった。その中でもフランクフルト学派を率いたホルクハイマーのユダヤ意識のあり方の解明は、この学派の性格と研究成果を見定めてくれるものになる。彼はドイツの大学で学長に選ばれた、初めての非改宗ユダヤ人であった¹⁾。

ホルクハイマーは、1895年2月に、シュトゥットガルト近郷のツッフェンハウゼン（Zuffenhausen）で綿糸製造業を営んでいた裕福なユダヤ人家庭にうまれた。ホルクハイマーの回想では、両親はオーソドックスとは言わないまでも、「保守的ユダヤ教」に属していた。家庭ではユダヤ教の規定を守りはするが、オーソドックスほど厳格な遵守ではなかった。父親はシナゴークへ規則正しく通い、たいていの規則を守っていたが、神学的問題については自分の判断を守っていたという。しかし政治的には国民派で1年間の志願兵役についたことを誇りに

していた。1918年にツッフェンハウゼンの名誉市民に推挙された彼はドイツを愛し、ドイツをハイマートと心底考えていた。

こうした家庭環境の中で育ったホルクハイマーにとっても、ドイツとユダヤは何の違和感もなく共存した。彼はそれを次のように回想している。

「ブルジョア家族、ドイツ・ユダヤ人家族の子供として、私は、おもちゃの兵隊の遊びに熱中した。コルク弾の鉄砲や火薬で鳴るピストルも私の武器庫にあった。10歳ごろ、1905年ごろであるが、当時、日曜日は私には特別に楽しい日であった。というのも（軍隊通りに面している）家のはりだし窓から、シュトゥットガルトの駐屯地教会の広場が臨めたからである。そこにはいろんな部隊の先遣隊、音楽歩兵隊などが、いろんなユニホームをまとって、教会の入り口に集まり、整列して入場していった。軍隊に私はなんら嫌悪を感じなかった。それどころか誇りにすらしていた。>我々の軍隊<であり、安全な生活の領域であり、平和や進歩が続く意識であった。こうした中で私は他の子供と同じように育った。」³⁾

したがってユダヤ教が自分の宗教であっても、ドイツ帝国が自分の祖国であることを彼はしっかりと意識していた。同時にホルクハイマーにとっては、幼少時にすでにユダヤ意識は精神に深く染み込んでいた。保守的なユダヤ家族の通例にあるように、食事はコーシャであった。7歳の時に重い病気にかかった彼の治療のために、両親がコーシャの習慣を破った。一度破られるとコーシャを守る理由がなくなり、以後普通の食事をとることになったけれども、彼にとってはユダヤ教のこの禁令は、それを守らなくなっても肉がミルクと一緒に料理されて供されるような場合には、口にはこびはするけれどもある種の抵抗感を感じるという。「子供時代にある生活によってえた特性は、大人になっても、ある種残っていると言えるでしょう。……それが何故か私はわからないままに。このときに私が思い出すのは、それが初期の習慣にさかのぼることです。」⁴⁾

「ユダヤ精神とドイツ精神との類似性」をホルクハイマーは感じていた⁵⁾。第一次世界大戦の勃発時、彼は奇妙な感情に襲われたという。戦争が、旧約聖書のヨシヤ記を想起させたのである。ヨシヤはユダヤの民の偉大な指導者、ユダヤの土地の創始者であるが、他の民族にとっては熾烈な征服者であった。偉大な征服者として、ユダヤ民族はヨシヤとその行為を誇りにした。ドイツが隣国の征服に向けて進入していった、1914年8月の勝利の進軍の知らせと聖書のユダヤ人の戦争行為とが、彼の中では一つになった。ドイツ統一を完成させた普仏戦争とユダヤの民によるエリコの壁の崩壊は、歴史的時間を超えて彼の精神の中では溶け合った⁶⁾。

第一次世界大戦では、ホルクハイマーの父親と同じように「ユダヤ人は、愛国主義者として、彼らが市民として所属していた国家のための良き意志の持ち主として、キリスト教徒に劣ることはなかった。」⁷⁾ホルクハイマーの盟友ポロックも愛国主義の立場にたった。しかしながらホルクハイマーには、そのユダヤ精神とドイツ精神の類似性にもかかわらず、否それだからこ

そ、その戦争への熱中はさめていた。ユダヤの民は、偉大な征服の後に統一を失いディアスポラの苦難を受ける。ドイツもまた、戦争によって民族的使命を失うのではないかという予感を彼はもった。実際それは、第一次世界大戦から第二次世界大戦終結に至るドイツの歴史として、若きホルクハイマーの「想い」を現実化した。

「私は戦争を開戦の日から憎んだ。私が平和主義あるいはその他の政治理論に与していたからではなく、サラエボでの殺人への怒りにもかかわらず、開戦の理由が、私を確信させてくれるようには聞こえなかった。というのも私は、尊敬するフランス人やイギリス人を知っていたからだった。あけすけにいうと私はフランス人の女の子に好意をよせていた。私はパリとロンドンを訪れていたし、その地の人々が我らの平和的な皇帝よりはるかに好戦的であるとは思えなかった。私よりも悪いはずはなく、私が彼らを撃つことになるとは思えなかった。彼らも私たちと同じく似通った意図や心配を持っていた。ドイツ帝国について、実家でならったことに対する考えが動揺した。何か恐ろしいこと、まさにヨーロッパで補償できなくなることが、人類に起こっているという感情を持った。歴史的課題、いわばヨーロッパ民族の使命、特に私が一員であるドイツ民族の使命が、救われがたいほど放棄されたように私には見え、それは極めて酷いことであった。」⁸⁾

ホルクハイマーは1917年に徴兵されたが、精神的状態から1年間で軍務適格性に欠くと言う理由で兵役を解かれた。その理由を彼は、「私はこの戦争に熱中するものを感じなかったので、私の精神状態は極めてミゼラブルになった。私は戦争に反対していた。私はこの戦争を狂気と思っていた」からであると語っている⁹⁾。

この期間、正確には1915年から17年にかけて彼は小説を執筆している。二十歳前後の多感な思春期の青年として、彼はそれらの小説の中に社会批判の要素を含ませている。貧困と価値のない人間とが同一視されること、貨幣に奉仕する精神、ひとの物象化の進行、また具体的には職業教育を旨とする教育、これらの社会風潮に対する批判を表現している。これらの小説を文学潮流の中に位置づけて、つまりゾラやイブセンの文脈で表現主義文学の社会批判文脈として読むことも可能であるが、ジャーナリスト、オトマール・ヘルシェ（Otmar Hersche）がホルクハイマーに独白を促したように、もっと個人的な事柄であった。それは、ホルクハイマー自身の「精神的及び社会的プロテスト」を語っている。個人の幸福こそ生活にとって決定的な要因であるにもかかわらず、戦争は、それらを破壊する「人間の共同生活の極めて非理性的なやり方の必然的結果」であり、戦争への両親の考え方に反対するだけでなく、彼が育ってきた世界の思考に抗議するものであった。彼は語っている。「後に私が理論的に定式化する多くのことがらが、この小説には表現されていると私は思っている。」¹⁰⁾

2 青年期の不安 反ユダヤ主義への嗅覚

1917年にホルクハイマーは二本の短編を書き上げている。7月に『ヨハイ (Jochai)』, 11月初めには『グレゴール (Gregor)』という題名をつけて残されている¹¹⁾。この二本の作品の主題は重なっており、対になっている。戦争と祖国。貧しい民衆の暴動と反ユダヤ主義。それがこの作品には折り重なっている。

「ヨハイは撃つことができなかった。」¹²⁾ ユダヤ人ヨハイは、「頭の中をぐるぐる回る考えの途方もない重さに喘ぎながら、そこから逃げ出した。」戦争に疲弊した貧しい人たちの暴動は、ヨハイには銃の引金をひかせるのではなく、良心を欺くこの世界を破壊し、虚偽に打ち勝つには「精神的に勝利する」こと、「蒙昧から癒される」ことを彼にさせるのである。

彼は恋人ヘルムヴィーゲに説く。豊かな彼女、施しをする彼女の階級とはかけはなれた生活に、貧しき人々は苦しんでいる。戦争はそれをいっそう悲惨にさせている。貧しき人たちは、昼も夜も、朝な夕なに生活の不安にさいなまされている。そんな彼らの怒りの声を前にして、なお「お前」は高価な羽毛ふとんに包まれ、ひととしての罪を恥ることがないのだろうか？彼らは我々の幸福、我々の富、我々の榮譽のために労働しているだけでなく、また彼らの苦しみの生活を悲しんで暮らしているだけではなく、彼らはこうした秩序 主人と奴隷の秩序 のために死ぬことになる。我々は男たちを工場から兵舎へと狩り立て、彼らの妻や恋人、息子や娘や父母から引き剥がす。そして我々は彼らに敵の「奴隷」、つまり彼らの「兄弟」を殺し、死ぬよう命じる。我々と我々の敵は、拷問道具を発明したのだ。まさに彼らは「人的資源」にすぎない。「我々の国、我々の財産が脅かされている。我々はなお、戦争は彼らの戦争であると信じさせる。我々はなお彼らを歌わせ、万歳の言葉をあげさせる。」「お前は新しい勝利に拍手をおくり、その平和を讃えるのか、それともお前はここから逃げるのか、私と一緒に。」「この犯罪の地を去って、憎しみのない、精神に支配された生活をはじめ、それを現実にするか、・・・幸福と努力と人間性のちょっとした要求、この新しい生活を望むか？」¹³⁾彼女の答えは「ヤー」。

その夜は「狩」の夜であった。ポグロームの夜であった。「飢えた、狂乱の猛獣のような人間どもは、何百年続いてきた苦しみの絶望から狩り立てられ、復讐、復讐と叫んでいた。かれらは殺人の快楽を抑える周到な教育を受けなかった。理性は発展させられなかったし、血に飢えるのをコントロールすることも習わなかった。判断力の欠片も同情を識るひらめきも目の中に光ってはいなかった。悪の塊のような、ごつごつした獣のような顔は、他所者の死の苦しみにニタニタ笑っていた。」「救いを求めて虚空を掴んでいる、やせ細った手。眼には死の時の恐怖。ドアが突然開いて幼な子や女の子たちが、群集の足元に倒れこむ。彼らは憤激の犠牲者になる。父や母は、もっとも破廉恥な残酷の犠牲者になる。金持ちのユダヤ人の家は、赤い炎で

燃え尽くされ、青白い死体が、生前慣れ親しんだ敷居の前に放り出される。野獣と化した民衆はさらに暴れまわる まだ喰い足りないように。」¹⁴⁾ ヨハイは、「ユダヤ人とまれ！」という言葉に怯えながら、夜陰に隠れて殺人者たちから逃れる。

「暴力の王国」から逃れ、「精神の王国」を求めてヨハイはヘルムヴィーゲとともに旅発つ。二人はベノスアイレスで新しい生活をはじめ、小さな住まいと平和な生活を見出す。だがその平和はつかの間のことであった。

ヨハイはグレゴールを想いだす。グレゴールもまた、撃つことができなかった。グレゴールの部隊は、絶望し飢えた女たちの前に整列した。士官が「撃て！」と命令した。発射命令は従われなかった。反逆の罪に問われてグレゴールは獄につながれている。グレゴールは恋人から引き裂かれ、苦役に苦しみ続ける。「助けて！」と彼は叫ぶが、それはむなしい。彼は助かることはできない。

グレゴールを想いだすたびに、ヨハイの心は病む。自分とグレゴールを分けたものは「偶然」にすぎない。グレゴールよりも幸福を求める権利を自分に与えてくれる理由、意味を探し求めて、ヨハイは自分の精神の鏡に、昼も夜も問いかける。グレゴールに一瞬たりとも恥じないものを彼は求める。グレゴールが非人間性に無慈悲にも耐えなければならないのに、自分は……？こうしてヨハイの精神は深く病み、闇の中をさまよう。

小説『グレゴール』には、グレゴールの恋人マルゴットと青年トムが登場する。芸術家グレゴールの部屋に残された絵の前に終日たたずみ、彼を想う悲嘆の地獄の日々を彼女は過ごす。マルゴットの愛の叫びによって、グレゴールがその恐怖の事態に耐えているのは不条理の世界であり、それを彼女は苦しむ。しかし世界は意味をもっているはずだから、彼女は彼を助けねばならない。グレゴールが苦しんでいるまさにそのときに、街角では人々は笑い、将軍は勝利を語り、人々は言葉に耳を澄ませながら家々に旗を掲げる。「街は狂っている！」¹⁵⁾

グレゴールは、しかしながら罪の責任を転嫁しない。彼は考える。自分は撃たなかった、しかし国家は富を保護せねばならないし、安全を創りださねばならない。その中でこそ芸術が発展するのだから。人間は臆病であり、保護される暴力を必要とする。誰もが秩序の結果を享受してきたのであり、誰もがその支払いをせねばならない。この論理によって、グレゴールは「肉体が逆らうが悟性が良しと認める運命に耐えることは、残酷だ」と結論する。そして「助けて！」と叫ぶ。それを聞いたマルゴットは彼を信じる。彼は彼女にとって真理であり、彼女との別離を良しと彼が認めたときに彼が判決を語ったということ。だからマルゴットは「すべてを成し遂げねばならない。なぜなら肉体は狂気にあらがうから。」「我々が行なうことは冒険である。自然は私の生活を拷問にかける。何故私は楽しんではいけぬのか？他人よりも私は悪しき存在なのか？」¹⁶⁾

トムもまた、街に出かけ、酒場に座り、グレゴールを語り、そのことが原因となって騒ぎを

惹き起こす。医者は彼が戦争ノイローゼにかかっていると診断した。彼もまた教会で死者の声をきいて医者の診断を受け入れ、医者に救いを求め、悟る。「世界は善である。昨日と今日は、病の夢である。」そして傷病兵のアジ演説に耳を傾ける。彼は、戦争と多くの犠牲者の責任はユダヤ人だと訴える。ユダヤ人、ユダヤ人だけが何百万人の血を流した者たちから利益を受けた。「我々の民族の人間には一度もない。我々の信仰の人間には一度もない。ドイツ人はいない。キリスト教徒はいない。ユダヤ人が全て引き起こした。ユダヤ人が我々の傷口から利益をかき集めた。我々の主を十字架にかけた同じ悪者たちだ！ユダヤ人を倒せ！」演説は、聞いた者に大きな衝撃を与える。トムもそれを聞いて考える。ユダヤ人に戦争の責任があるとすれば、彼らはそのためにも苦しむべきだ。ユダヤ人は一度も苦しみにすぎることにはなかった。それゆえ、彼は他の人と一緒に叫ぶ。「ユダヤ人をやっつけろ！」「ユダヤ人の家を壊せ！」民衆は知っている。警察は上層部のはっきりした指示を受けなければ、積極的な介入はしないことを。「民衆の暴動がボグロームで消え去ってしまうことが好まれないわけではない。」¹⁷⁾

トムは確信する。マルゴットも知っている。グレゴールは救うことができない。その代わりにグレゴールの復讐をすることはできる。グレゴールを追い詰めた「本当の原因」をみいだした。彼らの「朝は明けた。」¹⁸⁾

ホルクハイマーは、この二つの作品 そしてこの時期の作品の全て が表現主義スタイルをとっており、哲学的にはショーペンハウアの影響を受けていると自ら述べている¹⁹⁾。彼は、これらの青年期の作品が掲載されている全集第一巻の序文に寄せて「思想への忠誠、正義と平等への献身、愛とその犠牲、飽くなき徳の追求と世界におけるその役割、これらは未熟な年代の不安の根拠であった。そのような過激性の宿命、理想と現実の対照の表現は、あの時代の私の多くの語りの内容を規定していた」²⁰⁾と書き、こうした青年の攻撃性こそ、ショーペンハウアの哲学の洞察だと指摘する。そしてショーペンハウアにならって、意志こそ人間のバイタリテイの根源をなしており、意志が全存在を動かす、そのような人物として、ヨハイやグレゴールやトムを描く。そしてショーペンハウアと同じく「精神の最も純粋な表現は芸術である。だから人間の意志は芸術ですらあるだろう」²¹⁾とする。だからこそヨハイは「精神の人」であり、グレゴールやトムは芸術家として設定されているのである。

こうしたホルクハイマーの青年期をさして「青年実存主義の時代」と呼ばれているが²²⁾、ショーペンハウアとともに、すでに反ユダヤ主義は彼の問題意識に入り込んでいた。両親の家庭ではほとんど語られなかった反ユダヤ主義を、彼は個人的には何ほどこ経験していた。直接的な暴力行為ではなくとも、「教室の中であるいは下校時、悪童どもが『ユダヤ人！』と侮蔑する」ことがあったが、「先生はそういったことが耳にはいると、罰を与えてくれた」ので、大きな心の傷とはならなかったと言う²³⁾。

けれども『ヨハイ』で描かれるシーンは、ロシアのボグロームではなく、ドイツで起こるボ

グロームであり、この小説を読むかぎり、ホルクハイマーが1917年にすでに、1938年11月9日の「クリスタルナハト（水晶の夜）」²⁴⁾を予感しているかのような印象を与えてくれる。

彼が実際予感できたかどうかはともかく、小説では近代的反ユダヤ主義の「伝統的」な、しばしば持ち出され、大衆受けのするデマゴークを述べている。曰く。ユダヤ人は戦争を引き起こしながら、兵役から逃れて、銀行や工場に残って利益をひねりだした。大衆が貧困に陥ったのは彼らの責任だ、等々。人々がデマゴークに左右されることから、ホルクハイマーにとっては、反ユダヤ主義は人間の心情の非合理的構造に根をもっているがゆえに、ユダヤ人を擁護して理性に訴えることは効果のない行為であり、したがって反ユダヤ主義は、本質的に操作可能性を越えたところにある。それは、人類の、人間文明の致命的なリスクである。正義の観念を失ったトムは、個人に現れたそのリスクを示している。

正義の観念の喪失は、トム（に代表される民衆）を「狂気（精神の病）」へと誘うが、その危機を脱するために代替物が求められる。それがユダヤ人憎悪である。「自己保存衝動の最後の部隊」を「暴力的に」動員することをトムは決心する。「ひとは一緒の行為をしなければならない。そうでなければ気が狂ってしまう。」²⁵⁾トムにとって、彼と同じく相互に影響を与えあう反ユダヤ主義の暴徒との連帯は、「自由・救済」を意味している。その意味で青年ホルクハイマーにとって、すでに反ユダヤ主義は狂気ではない。

3 「ファシズムとユダヤ人」の時代 マルクスの読みの時代

ホルクハイマーの遺稿の中に1943年に書かれた「反ユダヤ主義研究プロジェクト計画」がある。そこで彼は、反ユダヤ主義研究に取り組むことが遅かったことを自己反省し、反ユダヤ主義研究に強力に取り組む決意を語っている。²⁶⁾その中でもとりわけ全体主義的反ユダヤ主義（totalitärer Antisemitismus）²⁷⁾研究に強調点をおいている。それは、「全体主義的反ユダヤ主義と前全体主義的反ユダヤ主義とを、宗教的差別と非宗教的差別とを区別せねばならない」²⁸⁾からである。そして全体主義的反ユダヤ主義の経済的・政治的歴史データを集め、全体主義的反ユダヤ主義に対して抵抗した民主主義的諸力の悲劇的な挫折を説明することを課題としている。

ホルクハイマー自身は1933年2月末に妻と共にジュネーブに逃れ、34年にアメリカに亡命し、彼及び彼の家族は全体主義的反ユダヤ主義の直接的暴力にさらされない幸運に見舞われている。この間の事情について彼は後にラジオインタビューで次のように回想している。少し長くなるがあげておきたい。²⁹⁾

ナチスの間、反ユダヤ主義には、私は直接直面しませんでした。というのもヒトラーが権力を握ったとき、私は亡命したからです。当初、私は不安があったので、妻と一緒にクロン

ベルクの自宅からフランクフルトのホテルへ移りました。講義は続けました。講義室に入っていくと、聴講生の半数は『ローテ・ファアーネ Rote Fahne』(訳者注: ドイツ共産党機関紙)を読んでおり、あと半数は『フェルキツシア・ベオバツハター Völkischer Beobachter』(訳者注: ナチス国粹主義紙)を読んでいたのが、その時期の特徴でした。ヒトラーが権力を掌握したとき、次のようにしました。私は1932・33年の冬学期に、哲学入門を読んでおり、論理学の問題を論じていました。しかしながらヒトラーが権力を掌握したあの月曜日に、これからは自由の概念を読むつもりだと私は学生に説明しました。そしてそのときから、すでにホテルで住みながら、哲学史における自由の概念に関して、実際多くの時間を割いて、私の理論を展開しました。妻と私は1933年3月の少し前のあの当時には、個人的には何も恐ろしいことは経験しませんでした。しかし私たちは2月28日の少し以前にドイツを去って、ジュネーブに居を移しました。それはまったく正しい時でありました。というのは私の自宅はクロンベルクの「ブラウン・ハウス」、つまりその地のナチスの本部になったのです。もし当時まだそこにいたなら、私の命はもはやおそらなくなっていたでしょう。私がアメリカにすでにいたときにも、まだ両親はドイツに残っていました。39年まで父はドイツを出ることを拒否していました。彼はその理由をいつも言っていました。「私はドイツに属している。私は自分がドイツ人だと感じているし、私の家族はヒトラーの家族よりもずっと長くドイツに住んできた。」彼はしばしば私に手紙を送ってきました。私は、手紙が開封され父に不都合がおこることを恐れていました。彼は家系図すらおくってきました。それは30年戦争にまでさかのぼるものでした。しかしついに戦争勃発の2週間前になって、私に手紙を寄こしてきました。「今、私はドイツを去りたい。その理由は新たに戦争が起こるし、それをドイツで体験したくないから。」私はベルンの知り合いの弁護士に至急電報を打ちました。数日後、両親は入国許可書を受け取りました。母は少し前から病気があったので、シュトゥットガルト市は、スイスへ行く場合には看護婦をつけてくれると私の父に説明していましたが、土壇場で彼らは父に電話をして伝えてきました。「残念ながらそれはできなくなったと考えています。我々は党の反対を受けました。」そこで父の税理士ヨゼフ・アメント (Joseph Amend) が 彼は私の学生時代の友達なのですが、父に言ってくれました。「やあ、そんなことは何でもありません。私が一緒に行きます。」そして彼は両親をベルンまで連れていってくれました。後に彼はゲシュタポと厳しい悶着になりました。ゲシュタポの告発に彼はいつも次のように抗弁しました。「ユダヤ人と一緒にいくことが恥であるかどうかには私は関心がない。それが禁じられているのか、許されているのか、ということだけである。禁じられているなら、君たちが私に何かする権利がある。禁じられていないなら、君たちは何もできない。」彼はその頑固さによって結局正しき態度を取りきったのです。彼には何も起こりませんでした。我々は今でも連絡をとりあっています。このエピソードが思い起こさ

せるのは、しかも社会学的、心理学的に重要でないわけではない。私が後に、すでに40年代に、アメリカでトーマス・マンと一緒に、どんな人がナチスの時代に迫害を受けたユダヤ人や非ユダヤ人を助けたか、という調査をしたことです。結果は明白でした。知られている以上に多くの方が個人的な危険をおかして、ユダヤ人を助けました。そしてもっとも援助をした集団は、敬虔なカトリック教徒でした。このヨゼフ・アメントもカトリック教徒でした。私は今でも貴方が考えられるように、彼に深く感謝をしています。

すでに30年代始めにホルクハイマーは、恐らくフランクフルト社会研究所の誰よりも早く、ファシズムの危険性、全体主義的反ユダヤ主義の問題の緊急性を意識していた。彼はヨーロッパの社会的指導者に、そのことを訴えたが、当時まだ真剣には受け取られなかったと言う。彼がえた反応は、「反ユダヤ主義は宣伝手段にすぎず、ヒトラーが政権をとりさえすれば、このばかげた事をやめるだろう」というものであった。フランスからは「この国は古いデモクラシーの国であり、民主主義の生活様式が習慣になっており、それゆえにフランスでは、どんな種類の反ユダヤ主義も政権の座につくことは不可能である」という返答をえたという³⁰⁾。

ホルクハイマーは、1937年9月ポロック宛に手紙を書いている。「ヨーロッパの全体状況は、本当に悲しいものです。戦争の不安自体は、いずれにしても文化的価値すべてがおぞましくも必然的に没落する、社会的発展の一つの契機をなしています。」³¹⁾この時すでにホルクハイマーは近代啓蒙の創り上げてきた西欧ブルジョア文化全体の崩壊という「黙示録的パースペクティブ」³²⁾を想い描いている。

批判理論が、初期のマルクス主義的理論アプローチに代わって『啓蒙の弁証法』、「道具的理性の歴史哲学」へと展開していく契機は、ホルクハイマーの手によるナチズムの反ユダヤ主義分析にある。そこでのドイツファシズム分析の基調に流れているトーンは、ペシミスティックな時代診断であった。それは資本主義の全体的発展傾向の、ペシミスティックな解釈によってなりたっている。そしてそれはユダヤ人迫害のドラスティックな先鋭性と結びつけられて解釈されており、ナチズムの全体主義的反ユダヤ主義が、ホルクハイマーの批判理論のトラウマとなっている。

このトラウマの記念碑的論文が、「ユダヤ人とヨーロッパ」である。この論文においてホルクハイマーは反ユダヤ主義を、国家社会主義社会を分析する中心にすえる宣言をしている。「反ユダヤ主義を説明しようとする人は、ナチズムを語らねばならない。……新しい反ユダヤ主義は全体主義的秩序の使徒であって、この秩序は、自由主義秩序が発展させたものである。……資本主義について語ろうとしない人は、ファシズムについても沈黙を守らねばならないはずである。」³³⁾ユダヤ人を社会的マージナルマンへと徹底化させる1935年の「ニュルンベルク法」、ユダヤ人企業の「アーリア化」、そして1938年11月の「水晶の夜」というナチスの一連の政策は、経済的暴力と政治的暴力が、直接的な公然のテロルへと上昇していったものである。

1939年9月1日付けの日付がある論文「ユダヤ人とヨーロッパ」が、この社会的事態から受けた印象にもとづいていることは明らかである。「ユダヤ人とヨーロッパ」でホルクハイマーが出発点に据えているのは、ナチス・ドイツにおいて、市場システムが資本主義的計画経済に取り替えられたという点である。「搾取はもはや無計画に市場で再生産されるのではなく、支配の意識的な実行においてなされる。……ファシズム諸国家での中央集権は急いで進められる。だがそれは、社会的矛盾を直接に抑圧しようとする計画的暴力の実践へと移される。経済はもはや、自律的なダイナミズムをもたない。」³⁴⁾全体主義国家では自由市場は廃止され、「自由主義はもう二度と蘇ることはありえない。」³⁵⁾計画経済による国家社会主義は、現代の社会形態となる。ファシズムは「世界システム」であり「全体主義的経済においては、飢えは戦時においても平時においても障碍ではなく、むしろ祖国への義務と思われる。」³⁶⁾

ホルクハイマーにとって、国家社会主義への資本主義の「発展」は、資本主義の質的転換である。自由主義においては、ブルジョア的支配関係は、市場という媒介システムを介して再生産されてきた。このシステムはブルジョア的支配関係を成立させ維持する要素であるが、市場の「匿名性」による経済上の「判決」は、誰に対しても等しく下される民主主義的要素を持ってきた。それは、生産過程における人間的特性を考慮することなく下されるのであって、その人間的特性を無視する非人間性によって、市場の「判決」は、逆に人間的なのである。しかし全体主義国家においては、媒介は廃止され「市場の匿名性は計画性に移行」し、「死すべき者と生きるべき者とが、あらかじめ定められる」のである。³⁷⁾

国家社会主義の反ユダヤ主義も、このテーゼを借りて説明される³⁸⁾。これまでユダヤ人はなによりも「流通」の社会領域で活動していた。ユダヤ人は「流通の代表者」であった。「市場という媒介」の排除がすすむにつれ、ユダヤ人の関与を表す道具としての貨幣の役割は薄れていき、ユダヤ人の生業たる流通領域は経済的意味を失い、貨幣のもつ、かの強力な力は消滅する。ユダヤ人は彼らの存在の正当な権利を失った。資本主義的計画経済は、ホルクハイマーにとっては宿命的に「ユダヤ人を不可能にさせる」ように見える。

そして自由主義経済市場での個人の破産に代わって、全体主義国家では、ある社会集団の「計画的絶滅」が登場してくる。「失業者の群れを非合理的に創りだした同じ経済的必然性が、今やマイノリティに対する十分に練り上げられた規定という形に変わった。」³⁹⁾「官僚が生と死を決定する。」⁴⁰⁾国家社会主義の反ユダヤ主義は、ホルクハイマーにとっては流通領域の全体主義的清算の結末だと思われた。「ユダヤ人は、取りやめられた機能（流通のこと。筆者注）を引き継いだ支配者の厳命による最初の犠牲者となる。国家による貨幣の操作は、...・貨幣の代表者たるユダヤ人に対する残酷な扱いに変わったのである。」⁴¹⁾

ホルクハイマーにとっては、全体主義的的反ユダヤ主義は、自由主義資本主義から国家社会主義資本主義、全体主義国家への「経済的発展」に、なによりも原因があった。したがって反ユ

ダヤ主義が経済的論拠によって説明されているかのような姿をとっている。「資本主義について語ろうとしない人は、ファシズムについても沈黙を守らねばならないはずである」というホルクハイマーの有名な命題が示すように、事実「ユダヤ人とヨーロッパ」では、三分の二以上が資本主義を語ることに割かれており、表題からは違和感を与えるほどである。

この経済的論拠による反ユダヤ主義の説明は、二つの点においてマルクスの分析に刺激を受け、マルクスの「ユダヤ人問題によせて」に重なっている。第一点は、ホルクハイマーも、マルクスと同様、経済領域におけるユダヤ人の特殊な役割から反ユダヤ主義を説明していることである。マルクスにおける「きたない商売と貨幣」⁴²⁾は、ホルクハイマーの場合には「流通の領域」として、「貨幣の代表者としてのユダヤ人」として、語られている。第二の点は次のことである。マルクスは、ユダヤ教の秘密は現実のユダヤ人の姿にあり、ユダヤ人は「私利」という欲望に生き、貨幣という「現世の神」を崇拜する、という。そしてマルクスは「ユダヤ教のなかに、普遍的な現在の反社会的要素」があるとみた⁴³⁾。ユダヤ人は資本主義の経済過程の犠牲者でもあるが、同時に「貨幣の代表者」としてこの過程への関与者となるのである。ホルクハイマーの場合には、国家社会主義は「自由主義的秩序の発展」であり、貨幣の役割が没落した結果、全体主義的反ユダヤ主義が登場するという論旨で展開されている。したがってユダヤ人は犠牲者である。しかし同時にユダヤ人は自由主義的ブルジョアジーとして、自由主義資本主義での「経済的機能」を果たしていた。だから「ユダヤ人は過去を失って多くの涙を流す。」⁴⁴⁾つまりユダヤ人自身が、全体主義的秩序の形成過程の関与者にもなるのである。

こうしたホルクハイマーの論調は、ユダヤ人研究者の間に複雑な反応を惹き起こした。社会研究所ジュネーブ支部のかつての責任者であったアンドリエス・シュテルンハイムは、アムステルダムから1940年3月24日に次のような手紙をホルクハイマーに寄せている。「ユダヤ人問題についてのあなたの論文について、多くのことが言うことができます。ただ私には、あなたが反ユダヤ主義をもっぱら国家社会主義の増殖物だとみているように思えてなりません。たしかに国家社会主義は反ユダヤ主義なしには考えられません。しかし逆に反ユダヤ主義は、例えば中世にも存在した現象であるのは確かなのです。」「ジンツハイマー教授（筆者注：法社会学者ヒューゴ・ジンツハイマー）も、貴方の論文を特別な関心で読まれました。けれども彼は、『自分の意見だと、あなたがこの問題を極めて経済的なものに制限してしまったと思う』と、あなたに伝えるように頼みました。」⁴⁵⁾

しかしホルクハイマーは経済的な分析だけで反ユダヤ主義を説明しようとしたわけではない。むしろ経済的説明を借りながら、合理性のブルジョア的形式である道具的性格を考えていた。彼は言う。「ブルジョアジーを規定するのは、理念ではなく効用である」「熟考することは、ここでは計算することである。」「ブルジョアジーは常にプラグマティストであったし、財産だけが関心事であった。」⁴⁶⁾19世紀では、経済的政治的自由主義が社会的権力の効率的な

形態であった。しかし20世紀の独占資本主義段階では、市場システムはその道具的理性性を失い、今や権威的国家が社会的権力を執行する効率的な形態となった。そのことによってユダヤ人もその「存在意味」を失ったのである。「各人の政治的自由、ユダヤ人の平等権、すべての人道的な制度は、富を十分に開発する手段として受け入れられた。民主主義的な諸組織は、安価な労働力の供給、確実に計算できる可能性、および自由な通商の拡大を促進した。…事情が変化して、諸組織は、それを存立させていた功利的性格を失う。これまで到達した段階での特殊な金儲けの条件に背を向ける理性性を、ユダヤ人企業家も、とっぴなこと、破壊的なことだとみなしてきた。ユダヤ人が大きく発展してきた現実には、自然的な道徳・・・つまり経済力の道徳が内在していた。弱い競争者をたえず労働者に零落させ、その人生を欺く同じ合理性、つまりこの経済的合目的性が今や、ユダヤ人にも断罪を下した。」⁴⁷⁾

ここにはブルジョア的合理性の道具的性格が指摘されている。ドイツ・ファシズムの全体主義的秩序の解釈は、後に『啓蒙の弁証法』で展開される合理性批判のための重要なモデルとなっているが、それに先立って彼は「社会研究所紀要 *Zeitschrift für Sozialforschung*」の最終号(1941年)の序文において、ファシズムの計画経済はもっとも深く非合理的である、と確認している。「私的経済グループの利害で立てられ実行される計画は、内的、外的な権力政治の要求の絶えざる変化の犠牲になる。その際、その計画が満たすのだと言っている公的な欲求は無視される。」それゆえ「権威的社会では...この非合理的合理性は方法をともなう狂気」となった。「抽象的進歩が勝利する」⁴⁸⁾。

『啓蒙の弁証法』でも語られるように、ホルクハイマーは、ファシズムの中にも「進歩と社会的後退」が相互に分かちがたく絡まっているのをみだしている。「権威的社会では、技術的進歩、社会的進歩及び軍事的進歩は没落と破滅の手伝い職人である。ファシズムはあらゆる境界を取り払うが、それは人間間の壁を強化するだけである。ファシズムはコミュニケーション手段を改良するが、それは人間を互いに一層引き離すだけであり、科学的発明はすべて、人間を自然に対してより盲目にするにすぎない。」⁴⁹⁾これをうけて1942年の論文「理性と自己保存」を彼は次の文章で始めている。「西洋文明の基幹概念は、崩壊しつつある。新しい世代は、もはやそれに信頼を置いていない。問題は、どれほど基幹概念がなお耐えうるかということである。その中心は理性の概念である。」このようにホルクハイマーは、全体主義的システムを「非合理的合理性」と考えるのである。

「ユダヤ人とヨーロッパ」において、ホルクハイマーは、国家社会主義による全体主義的反ユダヤ主義の重要な前提として、すでにブルジョア的合理性の道具的形態を構想している。彼にとってユダヤ人迫害は、ブルジョア的文化的崩壊の表現、反理性的行為であるだけでなく、まさに近代社会における合理性の狭隘な、計算的性格の結果と思えたのである。だからこそ彼は、国家社会主義は「近代社会の理論がはじめから言いあてていた近代社会の真相」と

述べ、結局は「ユダヤ人が人間としてはじめて生きることのできるのは、人類がその前史を終焉させるときなのである」⁵⁰⁾と語るのである。「全体主義的反ユダヤ主義は、決して特殊ドイツ的現象ではない。」⁵¹⁾

4 ユダヤ人と反ユダヤ主義 現代の野蛮

ホルクハイマーは、ドイツ・ファシズムの敗北後においても、なお反ユダヤ主義の問題への発言を続けた。「連合軍がファシズムに勝利した後の今でも、科学者は、反ユダヤ主義をさらに研究しなければならないし、勝利が結局恐ろしい敗北に逆転させられてはいけない。」⁵²⁾その際、ホルクハイマーにとっては、ユダヤ人差別の解決を目指す反ユダヤ主義研究の社会学や社会哲学の出発点になるべきものは、唯一精神分析研究であった。ホルクハイマーは、反ユダヤ主義団体を支持する警官を懲戒しない上司の態度の責任を問えるのは、いかなる場合であるかの例をあげて、反ユダヤ主義に対する「予防プログラム」(ホルクハイマー)を創るためには、民主主義的な理想、正義感や公平性への啓蒙といった「意識的精神」にアピールすることで事足りるものではなく、「無意識的な精神」を射程にいれなければならないと考える⁵³⁾。

そうしたホルクハイマーにとって、現代の反ユダヤ主義は九タイプに分類される。それは次のものである⁵⁴⁾。

いわゆる「生まれつきの」反ユダヤ主義者 the “born” anti-Semite。このタイプは、ユダヤ人的特徴、ユダヤ的な名前すら嫌悪の反応を呼び起こし、無意識的な感情移入過程によって、ユダヤ人に対する暴力への感情をもつ。しかしこのタイプの反ユダヤ主義者は、例えば恋人がユダヤ人だとわからなければ嫌悪を示すことがないので、ホルクハイマーの研究所グループでは自然的あるいは生まれつきの反ユダヤ主義だと考えられてはいない。この反ユダヤ主義者には抑圧された不安や願望の補償過剰が働いているとみられている。

宗教的 哲学的反ユダヤ主義者 the religious-philosophical anti-Semite。ユダヤ人は敵対的な宗教の信者であり、キリストを十字架にかけた者であり、キリスト教共同体から意識的に排除されるべき「異邦人」である。ヨーロッパではすでにほぼ消失しているが、アメリカにはなおこのタイプの反ユダヤ主義者が存在しているとされる。

無骨なあるいはセクト的反ユダヤ主義者 the back-woods or sectarian anti-Semite。このタイプは、パラノイア的であって、ユダヤ人の「陰謀」の観念に始終脅かされている。彼らはユダヤの世界支配の成立を確信している。彼らは、フリーメーソン等の友愛的結社を最大の悪と考える、擬似科学の半教養人である。

競争に負けた者 the vanquished competitor。彼らは相対的に下層階層に属し、ユダヤ人と経済活動領域で競合し、ユダヤ人の商店に出入りし、時にはユダヤ人に負債を負っている者

たちである。彼らは自分の経済活動の苦しみからユダヤ人に対する憎しみを持つ。ユダヤ人さえ経済生活からいなくなれば、自分の経済的困難はなくなるであろうという感情を持っている。

育ちの良い反ユダヤ主義者 the well-bred anti-Semite。ブルジョア上層の反ユダヤ主義。かつて貴族階級が彼らに向けていた排他性を真似してユダヤ人を排斥しようとする。このタイプの反ユダヤ主義は、至るところにあるが、特にアングロサクセン世界では強い。ユダヤ人の様々な態度を標的にして、ユダヤ人の劣等性の根拠にする。

「傭兵的」反ユダヤ主義者 the "condottiere" anti-Semite。戦後の生活の不安定から登場したタイプで、現代の青年失業者群の間で強い。このタイプでは、生活そのものではなく、「幸福」が重要なのである。彼らはニヒルであるが、それは、「破壊衝動」からではなく、彼らには個人生活がもはや何ら意味をもたないからである。ユダヤ人に対する憎しみは、ユダヤ人のもつ慎重な態度や「肉体的特長」にもよるが、彼らが失業者として経済的に根無し草であることから、プロパガンダを受け入れる感受性を持ち、期待できる指導者を熱狂的に受け入れることからでている。ドイツの青年運動で起こった反ユダヤ主義的傾向が例となる。

“ユダヤ狩” Jew-baiter, Judenhetzer。社会運動をするユダヤ人を憎悪するタイプ。彼ら自身の行動を革命的だと信じ、ポグロームの快楽を革命的行動、革命運動と思っている。彼らは潜在的にサディストである。それは、抑圧された怒りの産物である。SS指導者の大半はこのカテゴリーに入る。

ファシズム的・政治的反ユダヤ主義者 the fascist-political anti-Semite。政治的理由から反ユダヤ主義行動にでる者。ユダヤ人それ自体について直接的な偏見をもっているのではなく、ユダヤ人の絶滅を意識的に自分の政治目標との関連で計画しているタイプの反ユダヤ主義者である。ナチスのゲッベルスなどがこのタイプにはいる。政治的判断から彼らは反ユダヤ主義を実行する。したがってユダヤ人迫害から直接的な利得をえることはないが、システムティックに計画したユダヤ人絶滅によって、政治的諸関係を変えるプログラムを心に描いている。

親ユダヤ的反ユダヤ主義者 the jew -lover。ユダヤ人とキリスト教徒との違いを親ユダヤ的な形で強調する人々がいるが、こうした考え方は、人種差別に根をもつ反ユダヤ主義を含んでいる。この種の反ユダヤ主義に対してユダヤ人は敏感である。この種の人たちが言う、ユダヤ人が特別な能力をもつという説明には、その説明に何らかの秘密の差別を感じ取るので、ユダヤ人は不快感を覚える。

しかしこれらのタイプの差異を見いだすことも重要ではあるが、それを過大評価してはいけなないのであって、それらの差異にもかかわらず「これらは、最も深いレベルで起こっている破壊

的な自然の中で、我々が向き合っている一つの基本現象の異なった側面なのである。」⁵⁵⁾それは、「文明に対する密かな憎しみ」⁵⁶⁾なのである。ホルクハイマーは、フロイトを援用して、人間には、文明だと意味されるものを達成する、止みがたい衝動があるとする一方、同時に人間自身の中にある暗い力によって文明を絶えず阻止し、後退させる衝動があり、そうした相反する衝動の働きの歴史として、人類の歴史を把握している。この「暗い衝動」、「破壊快楽」こそ、反ユダヤ主義の根源に潜むものなのである。「文明は、・・・それ固有の無慈悲さによって、文明に敵対的だとわかった傾向をまさに煽り立てる。」⁵⁷⁾

文明が人々にもたらす攻撃的な破壊傾向が問題となると、ホルクハイマーにとっては、当然反ユダヤ主義だけではなく、現代社会の野蛮性一般が問題となる。ナチスのユダヤ人大量殺戮の原因を問うシューピゲル誌のインタビューに答えて、彼は次のように語っている。「私は貴方の言われたことに賛成しがたい。他の時代にもこうした恐ろしいことがありましたし、地理的にも別の場所でも起こったこともありました。しかもこうした残酷性の多くはユダヤ人だけになされたのではなく、その社会の他の集団にもなされました。残酷性を語ろうとすれば、必ずしも反ユダヤ主義を中心に置けないでしょう。」「残酷性が重要なのです。しかし反ユダヤ主義はそのままでは残酷性ではありません。私にとって重要なのは、人間が人間へと育っていくことなのです。」⁵⁸⁾反ユダヤ主義についての研究には、現代人の破壊的傾向が把握されねばならないし、当然この傾向は、ユダヤ人だけでなく、弱者だと見えるすべての人に向けられるものなのである。

しかし反ユダヤ主義が、現代生活にとっての特別な野蛮的現象としておこってきたのには、その歴史的な面が存在することも、ホルクハイマーは見逃してはいない。全体主義的反ユダヤ主義は、決して特殊ドイツの現象ではない。それは、社会経済的情况を反映した反ユダヤ主義のドイツにおける「勝利」であり、民族的特性によるものではない。反ユダヤ主義は、たんなる自然的現象ではなく、宗教的、政治的操作のもとに常におかれてきたのである。宗教的、政治的操作の力は、「カントやゲーテにまでさかのぼるドイツの著名人のあいだでも、反ユダヤ的活動から自由であったのは、数少ない人たちである」⁵⁹⁾ほど強いものであって、そうした操作によって大衆の社会的不満が、特定の人々に対する憎しみへ変化するときには、具体的な目標を持ち、彼らの不満をぶち空けることができる対象をもつことになる。異邦人や少数者は、容易にその対象となる。そのことによって彼等は自分たちの不快を合理化する術を見出すのである⁶⁰⁾。

とりわけユダヤ人は、その宗教性・精神性において大衆を脅かすのである。大衆にとってユダヤ人が敵となる歴史的な精神的理由は、キリスト教、偶像崇拜、民族国家、父祖の地、総統といった絶対的だとみなされているものを、「神の民」であることによって相対化するからである。ユダヤ人は、大衆の精神的拠り所を冷笑する。それゆえユダヤ人が存在するということだ

けで、憤激の対象にすらなる。システムが絶対的であればあるほど、ユダヤ人は緊急に排除されねばならないものとなる。なぜならユダヤ人は誰であっても 改宗の有無を問わず、ディアスポラの中で、「神の民＝選民」として他者からの孤立を保ちながら存在をしてきた、まさにその歴史の後継人であり、その存在そのものが大衆の依拠しようとする絶対性を破壊するからである。しかもユダヤ人はその相対化によって、その孤立性によって、ユダヤ「民族」の一員であり続けてきた。そしてそのことで大衆が本質的に欲している「民族性」「民族の共同性」を所有しているのである。「人々がユダヤ人を本質的にユダヤ人と認めることで、死をもってすら和らぐことのない復讐欲を呼び起こす」のである⁶¹⁾。

5 ドイツ・ユダヤ人もしくはユダヤ教 差別される者の精神

保守的なユダヤ教の家族に育ったホルクハイマーは、青年期の一時期、ユダヤ教への反感を示していたが⁶²⁾、ホロコースト以後、しばしば彼は、ユダヤ教とユダヤ人について言及している。アドルノとの共著である『啓蒙の弁証法』では、一神教としてのユダヤ教が真に啓蒙化された宗教とみなされているが⁶³⁾、アドルノの諸著作におけるユダヤ教への言及の少なさから判断して、この記述はホルクハイマーの考えの反映だと考えられる。そのように判断するとき、この考えは、ホルクハイマーのユダヤ教へのポジティブな立場を示す重要な指標となる。それを物語るように、週刊紙ツァイトによる、ホルクハイマーの生誕70歳を記念して企画された「マックス・ホルクハイマーへの公開書簡」⁶⁴⁾の中で、アドルノはホルクハイマーの「唯物論的形而上学」と呼ばれるものは、根本的には「旧約聖書の意識」であると語った。この指摘に対してホルクハイマーは、編集部宛に「私はその手紙の中に私の決定的なものを見出した。私の刺激、志向及び現在でも私の中になお影響している自分の過去について、始めて名をあげて呼ばれた。」と肯定している⁶⁵⁾。

それではホルクハイマーにとっては、ユダヤ教もしくはユダヤ精神とはどのように考えられていたのだろうか？彼にとってユダヤ教の最大の特徴は、律法の遵守と偶像崇拜禁止である。ユダヤ教のこの二つの宗教的要素が、ユダヤ人の精神をつくりあげ、同時に反ユダヤ主義、反ユダイズムの根底をなしていると考えられている。「ドイツにおける反ユダヤ主義の最も深い根は、次のような人々に対する無意識的な妬みと憎しみである。つまり信仰に対して計り得ない犠牲者をもたらし、そして生き延びてきた人々、科学の成果と日常的な経験とが一致しないドグマを信奉していることを告白する必要がある人々に対してである。」⁶⁶⁾

ユダヤ教が一つの「文明」をなしているのは、それが律法によって人々の生活を律しているからである。「本来の意味でユダヤ教にとって重要なのは律法」であって、それによってユダヤ人の生活は「構造化」されている。ユダヤ人にとって律法とは抽象的に記述されたものでは

なく、「体験されるもの」として意味をもっており、メシアへの希望が日々の生活の背景にあるにしても、それが行為のモチーフをなしているのではない⁶⁷⁾。その意味では、すでに「ユダヤ教は信仰ではなく生活における態度」である⁶⁸⁾。

律法に従って生きることは、ユダヤ人に独特の性格を与えている。律法という伝統を遵守することによって、ユダヤ人は「祖先との結びつき」を確保する。ユダヤ教では基本的に死後について語られることはなく、ユダヤ人は死後の罪も報いも期待しないし⁶⁹⁾、彼岸での彼らの再見は約束されていない⁷⁰⁾。それゆえにユダヤ人は、伝統を守ることを通じて、すでに死者となった人々との連帯を保持する。律法を守るということは、そうした意味をもつ。そこでは宗教は個人の関心事ではなく、集団の関心事という性格を担うことになる。律法を媒介として、律法が守られる限り、過去の人々に連なり、未来の人々と永遠に結びつく。だから律法の放棄はユダヤ教の「没落」となる。したがってこのこと、つまり律法に生きるということは、民族の一部としての意識に生きるということでもある。この点にこそ、キリスト教の「野蛮」の真っ只中で「文明の島」が守られた理由がある、とホルクハイマーは考える。

キリスト教においては個人とその永遠の魂が重要であるので、キリスト者は個人そのものであり、キリスト教は個人の総和から構成される。したがってキリスト教は伝道を行うのであり、個人の総和という意味においてキリスト教的「秩序」を築きあげる。それに対してユダヤ教においては、個人はあくまでも民族の部分である。旧約聖書から読み取れるように、ユダヤ教にとって「汝」は個人および民族を意味し、明白な区別はなされていない。「キリスト教の殉教者が恐ろしい苦しみに耐えたのは、地上での存在が永遠の精神への短い通り道にすぎないと考えるからである。…ユダヤ教の殉教者はまったく違っている。彼らは少なくとも個人的に自己のために達せられるものがあると考えのではなく、民族の中でさらに生き続けると確信している。」⁷¹⁾ ロシアのポグロームの時代にあっても、あるいはイベリア半島の強制改宗にあっても、名も無いユダヤ人が、改宗すればなお命の助かる可能性があるにもかかわらず、それを拒否した秘密はこの点にある。「ユダヤ人は民族として自己を感じ、忘れられたくないが故に拒否する」⁷²⁾のである。ユダヤ人は死をも克服する。

ユダヤ人への憎しみは、まさにこの集団性、民族性への「嫉妬」にある。中世初期のキリスト教会の勝利後にも、ユダヤ人がその民族性を放棄しなかったこと、居留地の民族の中に入り込まなかったことが、憎しみを強化した。ユダヤ人の悲劇は、根本的に「他所者」になった民族史と結びついている。しかし例えばケルンのユダヤ人は「他所者」ではなかった。ドイツ人が定住する以前に、ユダヤ人は歴史上登場している。

ではユダヤ人は、何故に「他所者」になったのか？それはコンスタンティヌスがキリスト教を公認にしたことによってである。十字架のもとで行なわれた反ユダイズムは、宗教的「他所者」に対する「怒りと嫉妬」から出てきている。拷問にかけられるユダヤ人をキリスト教徒は

期待に胸を膨らませて、殉教者の言葉を待った。「私はキリスト教を受け入れます。一刻も早く死なせてください。」奇跡が起こったのである。ユダヤ人がキリスト教徒になった！改宗した者は「祝福」され、解放されることもしばしばあった。しかし改宗をしない、律法に忠実に生きるユダヤ人も、数多く存在した。そしてあくまでも「他所者」であることを貫く強靱さは、キリスト教徒の「憎しみと嫉妬」を掻きたてる。

だがスペインの異端審問の歴史が語るように、改宗したユダヤ人が、キリスト教社会にすぐ受け入れられることは少ない。子供もしくは孫の代になってようやくキリスト教徒とみなされた。宗教的「他所者」に対する反ユダイズムが、「ユダヤ人である」理由での反ユダヤ主義に連続するのは容易である。「反ユダヤ主義はカソリックの教義には矛盾しているけれども、キリスト教会は反ユダイズムも反ユダヤ主義もおこなってきた。」⁷³⁾このことによってキリスト教徒は、その長い歴史において人類愛としてのキリスト教を無意識のうちに裏切ったといえる。

ホルクハイマーによれば、破壊的な反ユダヤ主義が静まっていた唯一の時代は、19世紀の自由主義の古典時代だと言う。この時期、ユダヤ人マイノリティに向けられる破壊的傾向は、植民地住民に向けられたのである⁷⁴⁾。しかしヨーロッパの市民社会は、アメリカ憲法の源流になるジョン・ロックが無神論者やカソリックをイギリス公民から除外したように、またフィフティテがユダヤ人を国家内の敵対国家だと考えたように、多元主義を認めるほど強固ではなかった。確かに市民社会は、暴力による抵抗を除外するものの、政治的、社会的、宗教的、思想的「寛容」を認める強さは持っていた。けれどもキリスト教市民社会近代の終わりには、宗教に代えて民族（ネーション）を最高位の「偶像」に据えることによって、ナショナリズムを進歩としての文明国家の旗印にした。それは、同じ仲間、祖国の制度への愛、所属している国家組織への忠誠である⁷⁵⁾。

ドイツ・ユダヤ人もまた、ホルクハイマーの父親のように、祖国への愛、祖国への忠実を示そうとした。信仰告白を私的事項とするリベラルなユダヤ教の形成も、この過程から成立する。日目の流れとユダヤ人の関係を律法で詳しく規定し、個人と共同体の生活を規制する原理としてのユダヤ教とは異なり、リベラルなユダヤ教は、共同体とそのメンバーを、生活している民族国家へ組み入れようとした。あるいは教養ユダヤ人の中では、改宗がすすめられた。同化である。しかしこの同化は、民族国家への同化であり、民族的・文化的多元主義を認めるものではない。「偶像」と化した民族は、民族としてのユダヤ人を容認せず、同化したユダヤ人の中にもユダヤ民族の痕跡を嗅ぎとる。それを「無邪気な反ユダヤ主義」としてホルクハイマーは次のように述べている。「かつてドイツの教養ユダヤ人は改宗をした。それは、同化ユダヤ人が東方ユダヤ人に対して示した態度と同じように、彼らが下層の者、つまり文明の中に迎え入れられない者から離れようとしたからである。彼らは決してジブシーでありたくなかった。だ

から非ユダヤ人も、ゲッターからのモノを何がしか残している同化ユダヤ人から離れようとする。反ユダヤ主義それ自体は極めて多くの心情をモメントとしているし、正直な心情である。ヒトラーに至るまで反ユダヤ主義者であった保守主義者の多くはこれをもっている。」⁷⁶⁾

それでは逆にユダヤ人は、民族性を保持し続けるがゆえに、ナショナリストであるのだろうか？それについてホルクハイマーは次のように考える⁷⁷⁾。

ユダヤ人は自民族を選民であると言った点で最初のナショナリストとあると言われてきているが、それはナショナリズムの間違った考えに由来している。ホルクハイマーが指摘するナショナリズムの本質的メルクマールは、自己の民族性の優越を主張して、異なるものを寛容せず、他者に対する支配要求を主張することである。しかしユダヤ教はそうした性格をもっていない。伝道をおこなわないユダヤ教の選民性は、神が祖先と結んだ厳しい犠牲を課す契約に基づいている。メシアはユダヤ人だけでなく、すべての民族を救済することになっている。メシアが到来するとき、正しき者たちは、民族を越えて、聖なる都市へ入ることが許されている。これはナショナリズムの考えとは異なる。ナショナリズムは異邦人を価値の低き者たちとみなし、「救い」の対象とはしない。むしろホルクハイマーによれば、キリスト教会こそ、コンスタンチヌス以来、無限定な支配要求をつきつけ、異教徒は迫害されるにとどまらず肉体的にも根絶する、厳しい不寛容という特徴を歴史に残してきた。キリスト教会の支配要求とナショナリズムの要求とは「親戚関係」にある。

キリスト者は、キリストに信仰告白をしてきたが、実際おこなったことは正反対のことであった。ユダヤ人の場合には、神と民族への信仰告白が迫害と死を招いた。迫害と死からユダヤ人が免れるためには、神を否定するか、あるいは国家建設をするか、のオルターナティブに立たされる。だがホルクハイマーには、この両方ともユダヤ教の「没落」を意味している。神の否定は世界からのユダヤ人の消滅であり、国家建設は不可避的なナショナリズムへの転化なのである⁷⁸⁾。

この困難なオルターナティブの中で、ユダヤ人の存在の意味について、ホルクハイマーは、ユダヤ人の実存そのものが、啓蒙化した社会における多元主義文化を示すものだと考える⁷⁹⁾。ユダヤ人は、ディアスポラの中で民族の〈伝道〉を果たすという理念を具体化してきた存在であり⁸⁰⁾、神のドグマが現実の科学的社会の中では耐えられないにもかかわらず、あたかも芸術作品が思想や感情を表現するに似て、名前をあげて呼ぶことのできない神の律法を守ることによって、精神をめぐる努力、生の意味をめぐる努力を世界に示しているのである⁸¹⁾。

6 イスラエルとは何であるか ホルクハイマーのアンビパレンツ

ユダヤ人としてのホルクハイマーの眼には、ユダヤ建国運動であるシオニズムや第二次大戦

後建国されたイスラエルはどのように映っているのだろうか。それを考える時にホルクハイマーが発する問いは、「イスラエルはバイブルのシオンであるのか」であった。

シオニズム運動について論じた論考そのものは、ホルクハイマーの諸著作にはないが、遺稿として残された1961年の「ドイツ・ユダヤ人について」(Über die deutschen Juden)の中で、シオニズム運動に関する言及が散見される。それによるとホルクハイマーは以下のように考えている⁸²⁾。

19世紀に広がるユダヤ人のヨーロッパ社会内での同化は、結局20世紀の偏狭なナショナリズムの高揚によって挫折を経験するのだが、多くのヨーロッパ・ユダヤ人にとって、リベラルなユダヤ教の普及に見られたように、平等を実際に実現するためには、自分が定住している民族国家へ自らを組み込むもしくは組み込まれることが、望みうる最良の方法に思えた。

同時にユダヤ人を受け入れる国家への同化とは原理的に異なる反応には二つある。一つは、批判を貫く正統派ユダヤ教の態度である。それはあくまでも同化に対して批判的・ネガティブな態度を貫こうとする。もう一つは民族国家での同化が求めようとする平等は不可能であるという認識から、ポジティブな精神で立ち向かおうとする態度である。それが、ユダヤの特徴をもった新しいナショナリズム、シオニズム運動である。シオニズム運動は、同化が成功するはずがないことの絶望からでてきている。ホルクハイマーは、このようにシオニズム運動をユダヤ人ナショナリズムとして捉えている。

近代シオニズム運動の唱道者テオドル・ヘルツェル(Theodor Herzl)は、ロシア、オーストリア、ドイツの反ユダヤ主義を知り、ドレフュース裁判をきっかけとして起こったフランスにおける差別キャンペーンを身近に経験した結果、急速にナショナリズム化し軍事化する近代世界では、多元主義が実現する見通しへの信念を失った。その見通し自体は、ホルクハイマーにとっても、確かな歴史認識として共通している。現代では反ユダヤ主義は宗教的現象ではなく、経済的課題と結びつくナショナリズムに活用される「時代の操作手段」である。「軍の攻撃力はますます住民の攻撃力を前提とし、反ユダヤ主義はそのための手段なのである。」⁸³⁾

ホルクハイマーの父親のようなドイツ・ユダヤ人の大半がそうであったように、ユダヤ人は愛国主義的市民として生活するのが普通であった。しかしながらユダヤ人が生きようとすれば、ナショナリズムの時代には、同化は国家への同化ではなく、「民族の道」への同化を必要とする。ヘルツェルの著書『ユダヤ人国家』は、近代シオニズム運動の始まりをあらわしているだけでなく、多元主義を実現するヨーロッパ諸国家への疑念をもあらわしている。ヘルツェルの求めるシオニズム運動は、ヨーロッパにおける多元主義文化の到来するチャンスをもはや信頼しない運動であり、多元主義を断念した、ユダヤ教の反応の一形態なのである。シオニズムが内包しているものは、それ故、ユダヤ精神にとってもヨーロッパにとっても、陰鬱な状況なのである。

このように考えるとき、ホルクハイマーにとっては、ヘルツェルのユダヤ国家建設の運動は、自由な個人を実現するはずの多元主義社会の早急な断念であり、ナショナリズムへの転落という風に映るのである。

このような性質としてとらえられるシオニズムの結果としてのイスラエルは、初めから難問を抱えている。メシア的観点から考えると、他の地域ではなくイスラエルの地においてユダヤ国家が建設されたことをどのように評価したらよいのだろうか？ バイブルで語られているのは、メシアは、あらゆる民の正しき者達をシオンに導くというものである。しかし現実のイスラエルは、ユダヤ民族ナショナリズムが結実した国民国家である。「イスラエルはバイブルのシオンであるのか？」⁸⁴⁾ この問いに対する答えは、否定的である。多元主義の実現を断念したナショナリズム国家としてのイスラエルは、預言と結びつかない。

しかしながらイスラエルの国家建設にもかかわらず、ユダヤ人への迫害は進行する。迫害を受けた人々が、どこへ逃げたらよいかわからないときに、イスラエルは避難場所になる。このこともホルクハイマーにとっては決定的に映る。それゆえイスラエルは肯定される。

だからユダヤ人が常に「苦境」に追い込まれてきたと同じように、イスラエルもまた「苦境の国」⁸⁵⁾なのである。そしてホルクハイマーは自問する。「私にとって決定的なことは、次のことだ。イスラエルは多くの人々にとっての難民収容所である。しかしそれにもかかわらず、今日イスラエルが旧約聖書の預言と一致しているかということ、私にはそうは言えないように思える。」⁸⁶⁾

イスラエルへの疑問は、1960年に行われたアイヒマン裁判へのホルクハイマーの批判にもはっきりと見られる。アイヒマン裁判について、西欧社会ではユダヤ人の「最終解決」の実行に際してアイヒマンの果たした役割から、そしてヨーロッパにおける反ユダヤ主義への「後ろめたさ」から、正面きって反対の世論は起きなかった。しかしイスラエルという「ユダヤ人国家」

正確にはユダヤ人でのみ構成されている国家ではない—には、アイヒマンを裁く権利があるか否やについては、知識人の間には疑問があった。アイヒマン裁判は、ユダヤ人知識人にも波紋を呼び起こした。

ホルクハイマーもまた、アイヒマン裁判の「正当性」について、疑念をもち、次のように批判する⁸⁷⁾。形式的理由から言えば、アイヒマンは、イスラエルで殺人を起こしたのではない。刑罰は、その国が国境内で法律を遵守させる強制手段であり、その目的は威嚇である。この観点からすると、アイヒマンに極刑が言い渡されたとしても、アイヒマンの「後継者」には威嚇にはならない。そう想うのはイスラエル社会の「妄想」である。アルゼンチンでアイヒマンをイスラエル市民が捕らえ、こっそりイスラエルに連行した行為は、政治的状況から黙許されているだけであって、アイヒマン裁判もやはり、政治的状況から「黙許」されているだけである。

それでは裁判についての内容上の理由からみれば、どうであろうか。それに対してもホルク

ハイマーは疑念を表明する。イスラエルの主張する理由は、「裁判はイスラエルの青年と他の国の人々に対して第三帝国について啓蒙をするものである」⁸⁸⁾ というものである。

しかしホルクハイマーは、新聞の大見出しやセンセーショナルな報道によって作り上げられる印象や認識は、表層的な認識であり、悪しき「記憶」としてしか残らないと言う。それは「殺された者たち」を政治的教育的手段としてのプロパガンダにするという行為である。そうした計算に基づく裁判は、反ユダヤ主義のものであって、ユダヤ精神のものではない。精神の奥にまで達しない、プロパガンダ的認識は、いつしか「忘却」の海に流れでて、「未来の総統とその追従者」の再来を防ぐことには役立たない。

しかし裁判を正当化しようとするあらゆる試みを越える、最初で最後の理由は、自明な前提としての「ひととしての贖罪」である。しかしここにもホルクハイマーは、異端審問の陰鬱な光景を想いだす。アイヒマンが人間的な裁判や判決後に自分の犯行を「償う」ことができるという考えは、ホルクハイマーにとっては「犠牲者への嘲り」「残酷でグロテスクな冷笑」と映る。むしろ犠牲者の家族の誰かが、アルゼンチンでアイヒマンを殺したならば、その犯行は、誰からも理解される。しかしイスラエルの言う「贖罪」という形での「復讐」裁判は、用意周到に「演出」されればされるほど、正しい衝動との矛盾を露呈せざるをえない。

ディアスポラの中でユダヤ人以上に「苦しみ」を受けた者はいない。その中でユダヤ人の歴史を貫流しているのは、「暴力を真理の論拠」として認めるのを拒否することであった。キリスト者が苦しみを通して聖なるものになると考えるのに対して、ユダヤ人は、それとは異なって、受苦を聖化することなく、苦しみを経験として受け容れることによって、死者を記憶し続けようとする。だとすれば「贖罪」という形は、死者を忘却する装置になるにすぎない。ユダヤ人に対してなされた非人間的な行為（ユダヤ人の苦しみ）の廉で、「贖罪」のための「刑」暴力をアイヒマンに加えたいという願望は、イスラエルの精神的「貧困」だと、ホルクハイマーは考える。

しかしながら、イスラエルの裁判を批判するホルクハイマーは、批判が現実政治的ではないということも意識している。イスラエルという新国家を建設している政治家や実務家にとって、裁判は国家建設のための政治的社会的意味をもっている。アクティブな世界では、裁判は意味をもっている。ホルクハイマーはアイヒマンへの断罪を否定することはしない。にもかかわらず哲学者 彼はアイヒマン裁判については、実務家ではなく哲学者として語っている としてホルクハイマーは、イスラエルには裁判権がなく、アイヒマンを捕らえた国に戻すことを弁護する。それによってホルクハイマーが語ろうとするものは、裁判から何ら良い結果がうまれないこと、ユダヤ人の安全と地位にとっても、自己意識にとっても良いことがないということなのである。それ以上でもそれ以下でもない。アイヒマン裁判によって反ユダヤ主義がなくなることはないし、ユダヤ人国家にとっても、ユダヤ人にとってもプラスになるものはない、とい

う確信である。

7 批判理論とユダヤ教 結びとして

ホルクハイマーは、ユダヤ教に関するまとまった著作を残してはいない。しかし講演やラジオ放送や遺稿や、あるいは著作のそここで、ユダヤ教、ユダヤ精神への言及がしばしばなされている。ある対話の中で彼は次のように述べている。「死後においてユダヤ人は報いも罰も期待していません。なぜならユダヤ教においては基本的に、死後については語られていないからです。ユダヤ人は禁令に従うことによって結束しています。そしてこのことが、ユダヤ教について考えたときに、ユダヤ教へのシンパシーを私に起こさせてくれるものなのです。」⁸⁹⁾ このようなシンパシーは、ホルクハイマーの批判理論を考えるときにも通底しているように感じられる。

まず気がつくことは、批判理論もユダヤ教も個人が救済の受け手ではないということである。ホルクハイマーにとって、ユダヤ人は個人と民族がいわば一つの存在であり、個人は民族という一般性から切り離すことができないものである。そして旧約聖書で語られる「汝」は、個人だけでなく全民族をも指すものであり、明白な区別は不可能であると考えている。その結果、ホルクハイマーは「今や私は、ユダヤ教が私にそんなに関心を持たせる点に到達した。同一化は一人の他者とではなく複数の他者としてである。私は他者たちの運命に関心がある。私は、私が生きつづけるであろう人類の分枝として自らを認識している。」⁹⁰⁾ という風に考える。

同じように「汝自身の如く、汝の隣人を愛せよ」という旧約聖書の命題は、ホルクハイマーによれば、「隣人は汝と同じ存在である」、すなわち人間は同一であるという考えから結果する愛の意味だと解釈する。「汝自身の如く、汝の隣人を愛せよ」の翻訳は、完全に正しいものではなく、本来的には「汝の隣人を愛せよ。隣人は汝と同じ存在である」と解釈できるものなのである。バイブルの言葉のこの解釈は、「汝自身の如く、汝の隣人を愛せよ」という命題に固着するエゴイスティックな要素を除去することができる⁹¹⁾。

批判理論も又、個人の実存をエゴイスティックに考えるのではなく、類としての人間一般の歴史の結果として考えるものである。批判理論は、個人がもっている既存の社会の「理念」が、個人の産物であると同時に人間の歴史的営為の産物であると考えており、そうした「理念」によって構造化された「制度」が、反転して人間一般でもある個人に対して「強制 暴力的であれ非暴力であれ」するものとして立ち向かってくる事態を批判するものである。そこから批判理論は、個人の特異な実存と人間の全体との関連を洞察し、類の活動として現実化される個人の活動が目指すものと、現実とその結果到達されたものとの異同を深く認識し、類の現実として立ち現れる管理された世界の危機を、何とかして克服する方向を見出そうとする。その希

望は、個人と人間全体との関連の認識から、人間相互の連帯が生じるという確信である。マルクスが人間の連帯を労働者の連帯として把握したのに対して、ホルクハイマーは、ユダヤ教が連帯の概念を人間全体へと拡大し、個人としての利用や利益を期待しなかったことに、批判理論の考える連帯の可能性をみている。

さらにホルクハイマーは、より良き正義の社会を具体的イメージとして、決して語ろうとはしない。その社会によって既存の社会が批判されることになるはずのものであるが、そうした名をあげた社会像を描こうとはしない。その頑なな態度は、偶像崇拜禁止と神の名を呼ばないユダヤ教の精神と重なるものがある。彼はこの禁令に普遍的な意味を与えているように見える。批判理論の特徴をなしている「否定的批判」という契機は、この偶像禁止と神の名を呼ばない精神と関連していることが想像できる。

彼が使用する「まったきの他者」という概念も、神学における「神」や「絶対者」を意味しているが、そのことにかかわって彼は、「神は存在するか、もしそうなら神について何が言えるか」という質問に次のように答えている。「神は存在する、神は正義であり、善である、という風に、私は単純に答えることはできない。なぜなら我々は、正義とか善とかいう言葉や、つまるところ神という言葉自体を「否定の弁証法」で説明され、批判理論で考えられているようにポジティブな姿をとっては決して定式化できないのであって、本来的に神ではない<もの>によってのみ定式化できるからである。この否定の中に>他者<の肯定があり、それを我々はまさに>他者<という言葉によって述べることができるのである。」⁹²⁾

このように、否定的批判という形をとってのみ、希望を語るができるというのは、アウシュビッツへ至る「啓蒙」と脱魔術化によって「神」を失った時代では、ホルクハイマーは唯一の正しい方法だと確信している。ホルクハイマーによれば、批判理論は「神学を解消したが、それが示しえる新しい天上を見出さなかった。」⁹³⁾のである。それは「否定的神学か？」と問い直されたとき、ホルクハイマーはそれを肯定し、「神が存在しないという意味ではなく、神は叙述不可能であるという意味で否定的神学である」と応答する⁹⁴⁾。我々は神を呼びださえないが、神が存在するかのように扱うことができる。このホルクハイマーの批判的態度は、人間的倫理の源泉の一つとして重要なものである。そしてそれがホルクハイマーをして、ユダヤ教へのシンパシーを持ち続けさせたものであるにちがいない。

注

- 1) ホルクハイマーは、1950年にフランクフルト大学の哲学部長に選任され、翌1951年に学長に就任し、53年までその職にあった。
- 2) Max Horkheimer, *Gesammelte Schriften* (以下GS) Bd. 7 [Dokument-Station (Gespräch mit Otmar Hersche)] 及び [Das Schlimme erwarten und doch das Gute versuchen (Gespräch mit Gerhard Rein)]
- 3) GS Bd.8 [Nachwort (zu Portrats deutsch-jüdischer Geistesgeschichte)] S.176

4) GS Bd. 7 S.443-444

5) GS Bd.8 S.175

6) GS Bd.8 S.176

聖書のヨシヤ記には、モーゼの死後、ヨシヤが主の命に従い、ユダヤの12の部族を率いてヨルダン川を渡り（東から西へ）エリコを征服したことが書かれている。その模様を聖書は次のように描いている。「角笛が鳴り渡ると民は関の声を上げると、城壁は崩れ落ち、民はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領した。彼らは男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅びつくした。」（『聖書 新共同訳』日本聖書協会 旧401頁）

7) GS Bd. 8 S.192

8) GS Bd.8 S.176

9) GS Bd. 7 S.321

10) GS Bd. 7 S.317

11) GS Bd.1 所収

12) GS Bd.1 S.264 以下

13) GS Bd.1 S.266

14) GS Bd.1 S.266-267

15) GS Bd.1 S.288

16) GS Bd.1 S.297

17) GS Bd.1 S.295-296

18) GS Bd.1 S.297

19) ホルクハイマーは、生涯を通じてショーペンハウアの影響が決定的である、とインタビューで語っている。（GS Bd. 7 S.321）「ショーペンハウアの哲学は、マルクスのそれと並んで、ホルクハイマーの思想世界の発展段階すべてに関係し、その始まりと内容に極めて大きな特徴を与えている鋳（かすがい）である。」（Zvi Rosen, Max Horkheimer, 1995, Verlag C.H.Beck, S.66）

20) GS Bd.1 S.20

21) GS Bd.1 S.248

22) Judith Marcus and Zoltan Tar, The Judaic Element in the Teachings of the Frankfurt School, In :Leo Bäck Institute Year Book 31, 1986, p.345

そこでは次のようにホルクハイマーの思想の遍歴がまとめられている。「20年代は青年実存主義の時代で、ユダヤ意識を備えていた。30年代は折衷的マルクス主義者で、ユダヤの影響は「地下水脈」であった。40年代はホロコーストの衝撃のもとに絶望の哲学をもたらし。60年代はそれらとともにユダヤ意識の影響の強化をもたらし。一時期、研究所の共同者であったハンス・マイヤーは、それを、「他所の世界への小旅行から・・・ブルジョアの起源への、両親への、ユダイズムへの帰還」だと述べている。」

23) GS Bd.8 S.176

24) 1939年11月9日から11日かけて、ナチスによって組織的にドイツ全土で繰り広げられたユダヤ人迫害。Reichskristallnacht（水晶の夜）事件と呼ばれている。ドイツ全土で1,000以上のシナゴークが破壊、放火され、約7,500軒のユダヤ人商店、数千にのぼると推定されている個人住宅が略奪、破壊された。26,000人のユダヤ人が逮捕され、ダッハウ、ブーヘンバルト、ザクセンハウゼンの強

制収容所へ送られ、この夜に少なくとも91人が殺害された。(Günther Bernd Ginzler, *Judischer Alltag in Deutschland 1933-1945*, Droste Verlag, 1993)

25) GS Bd.1 S.296

26) GS Bd.12 [Plan des Forschungsprojekt über Antisemitismus] S.168

27) ホルクハイマーは、全体主義的反ユダヤ主義 (totalitärer Antisemitismus) という用語を直接的にはナチスの反ユダヤ主義の分析の中で使っているが、その含意はナチスの反ユダヤ主義を超えて現代的反ユダヤ主義をも念頭に入れている。だから彼は「平均的なアメリカ人は、全体的な反ユダヤ主義とはいったい何を意味しているのか、についての明白な観念、意識的な観念をもっていない。」(GS Bd.12 S.182) と述べている。

28) GS Bd.12 [Zur Psychologie des Antisemitismus] S.178

29) GS Bd.7 [Dokument-Station (Gespräch mit Otmar Hersche)] S.328

これは最初、1969年10月10日及び12月17日にスイスの放送局で放送され、1974年にルツエルンの『祖国』誌で活字となっている。

30) GS Bd.5 [Antisemitismus: Der soziologische Hintergrund des psychoanalytischen Forschungsansatzes] S.365

31) GS Bd.16 S.235, (1937年9月20日付け手紙)

32) Ullrich Wegerich, *Dialektische Theorie und Historische Erfahrung*, Königshausen & Neumann 1994, S.50

33) GS Bd.4 [Die Juden und Europa] S.307

邦訳では清水多吉編・訳によるホルクハイマー『権威主義的国家』(紀伊国屋, 1975)に「ファシズム体制とユダヤ人」という表題で所収されている。本論文では、この邦訳書を参照させていただいたが、訳は変更している。

34) GS Bd.4 S.316

35) GS Bd.4 S.315

36) GS Bd.4 S.315

37) GS Bd.4 S.325

38) ホルクハイマーは、ナチズムが計画経済であるという、間違った解釈から説明をしている。それは、国家社会主義というナチスの標榜やユダヤ人企業の没収というナチスの政策から考えられたものと思われる。この点については、資本主義の性格から反ユダヤ主義を説明することは、「ユダヤ人とヨーロッパ」以後では採用されていない。「ユダヤ人とヨーロッパ」は、ホルクハイマーの理論発展 初期のマルクス主義的立場から『啓蒙の弁証法』への発展 の転換点である。ナチズムの資本主義性格については、したがって、後期の著作では、述べられることはなかった。

39) GS Bd.4 S.325

40) GS Bd.4 S.323

41) GS Bd.4 S.325-326

42) マルクスエンゲルス全集, 第一巻, 大月書店, 1959年409頁

43) 同上

44) GS Bd.4 S.323

45) GS Bd.16 S.707及び S.708

46) GS Bd.4 S.323及び S.324

- 47) GS Bd.4 S.324
- 48) GS Bd.4 [Vorwort (zu Heft 2 des . Jahrgangs der Zeitschrift für Sozialforschung)] S.415及びS.416
- 49) GS Bd.4 S.415-416
- 50) GS Bd.4 S.328
- 51) GS Bd.8 [Vorwort (zu Paul W. Massings Vorgeschichte des politischen Antisemitismus)] S.127
- 52) GS Bd.5 [Antisemitismus: Der soziologische Hintergrund des psychoanalytischen Forschungsansatzes] S.365 この論文は、Ernst Simmel編の“ Anti-Semitism. A Social Disease ” 1946の序章として書かれたものである
- 53) Ebenda
- 54) ホルクハイマーは、この分類を繰り返し述べている。GS Bd.4 [Zur Tätigkeit des Instituts. Forschungsprojekt über Antisemitismus] ,Bd.5 [Antisemitismus: Der soziologische Hintergrund des psychoanalytischen Forschungsansatzes] , Bd.12 [Zur Psychologie des Antisemitismus] これらのタイプのうち、最後の親ユダヤ人タイプは、1941年の論文にのみ書かれており、他の論文には見出せない。しかし1962年4月に行なった講演記録の質疑応答では第9のタイプへの言及がなされている。(Max Horkheimer, Über das Vorurteil, Westdeutscher Verlag, 1993)
- 55) Ebenda, S.366
- 56) GS Bd.12 [Zur Psychologie des Antisemitismus] S.180
- 57) GS Bd.5 [Antisemitismus: Der soziologische Hintergrund des psychoanalytischen Forschungsansatzes] S.368
- 58) GS Bd.13 [Über Grausamkeit in der Geschichte, Gespräch mit Rudolf Ringguth und Georg Wolff]
これは雑誌SPIEGELのインタビューの草稿である。しかし公刊されなかった。
最初1971年5月にインタビューが行われた。テーマは「ユダヤ人とドイツ人」であったが、インタビューの開始と同時にホルクハイマーは、編集者がつけたようなタイトルの内容にいきなり入っていった。1971年6月にWolffがタイプ起こしの原稿を送り、10月にホルクハイマーが手を加えたものができたが、その時にさらに付け加える提案が彼からあった。1972年12月にもさらにWolffの側からの提案があり、1973年4月に生前の最後のインタビューが行われた。
- 59) GS Bd.8 [Vorwort (zu Paul W. Massings Vorgeschichte des politischen Antisemitismus)]
- 60) GS Bd.13 [Über Grausamkeit in der Geschichte Gespräch mit Rudolf Ringguth und Georg Wolff]
- 61) GS Bd.6 [Zum Antisemitismus] S.214
- 62) GS Bd.7 [Das Schlimme erwarten und doch das Gute versuchen (Gespräch mit Gerhard Rein)] S.443-444
- 63) Zvi Rosen, Max Horkheimer, Verlag C.H.Beck, 1995, S.144
- 64) Die Zeit, 1965年2月12日
- 65) GS Bd.18 S.602 編集部宛のこの手紙は、4月9日に同紙に読者欄に掲載された。
- 66) GS Bd.14 [Die tiefste Wurzel des Antisemitismus in Deutschland] S.362
- 67) GS Bd.14 [Das Juden-eine Zivilisation] S.400
- 68) GS Bd.14 [Zwei Ansichten über das Judentum] S.527
- 69) GS Bd.7 [Das Schlimme erwarten und doch das Gute versuchen] S.443
- 70) GS Bd.14 [Tradition und Judentum] S.388
- 71) GS Bd.7 S.401

- 72) GS Bd.14 [Die Juden haben den Tod überwunden] S.341
- 73) GS Bd.5 [Antisemitismus: Der soziologische Hintergrund des psychoanalytischen Forschungsansatzes] S.370
- 74) Ebenda
- 75) GS Bd.8 [Über die deutschen Juden] S.162
- 76) GS Bd.14 [Unschuldiger Antisemitismus] S.103
- 77) GS Bd.14 [Judentum, Christentum, Nationalismus] S.410
- 78) GS Bd.14 [Dialektik des Judentums] S.314
- 79) GS Bd.8 [Über die deutschen Juden] S.161
- 80) GS Bd.14 [Die unsterbliche Seele, das unsterbliche Volk und der Nationalismus] S.404
- 81) GS Bd.14 [Das Judentum und der Gedanke der Solidarität] S.533
- 82) GS Bd.8 [Über die deutschen Juden] S.161ff.
- 83) Ebenda, S.167
- 84) GS Bd.7 ["Was wir >Sinn< nennen, wird verschwinden." (Georg Woff, Helmut Gumnior)] S.353
及び [Die Sehnsucht nach dem ganz Anderen (Gespräch mit Helmut Gumnior)] S.398
- 85) Ebenda
- 86) GS Bd.7 [Die Sehnsucht nach dem ganz Anderen (Gespräch mit Helmut Gumnior)] S.398
- 87) 以下の論述については GS Bd.8 [Zur Ergreifung Eichmanns]
- 88) GS Bd.8 S.156
- 89) GS Bd.7 [Das Schlimme erwarten und doch das Gute versuchen (Gespräch mit Gerhard Rein)] S.443
- 90) GS Bd.7 [Die Sehnsucht nach dem ganz Anderen] S.401
- 91) GS Bd.7 [Christentum, Marxismus und studentische Protestbewegung] S.297
- 92) GS Bd.7 [Himmel, Ewigkeit und Schönheit] S.293-294
- 93) GS Bd.6 [Kritische Theorie] S.253
- 94) GS Bd.7 [Himmel, Ewigkeit und Schönheit] S.294

Max Horkheimer and Anti-Semitism

The Frankfurter School led by Max Horkheimer was the most remarkable "Jewish sect" that German Jewry produced. However the discussion of the Judaic elements in the Frankfurter School thought was accorded relatively little attention in the critical literature on the School.

Max Horkheimer wrote two novels in his youth. In these novels he expresses the eternal longing of the Jew for justice and the movement of anti-Semitism. In "Juden und Europa" he emphasizes that the circulation sphere where the Jew have worked successfully was deprived by the planned economy of the bureaucracy. Therefore he asserts that the Jew becomes the object of expulsion, the Holocaust.

Horkheimer thinks that, in order to develop a program against anti-Semitism, we must not only appeal to "the conscious mind(der bewußte Geist)" such as a democratic ideal, feeling of justice and enlightenment to fairness, but also we should take into consideration of the unconscious mind. Anti-Semitism comes from a fundamental phenomenon on the deepest level of a destructive nature. It is the secret hatred for civilization.

Horkheimer has an ambivalent attitude towards Israel. Israel gives asylum to many Jewish people, but he has to ask whether Israel is the Zion of the Bible because the Bible states that the Messiah will lead the righteous people of all nations to the land of Zion. It remains questionable that the existence of Israel is the fulfillment of the prophecies of the Old Testament.

In the case of Jewish people the confession of faith to the God and Nation brought the persecution and the death. The Jew stands in front of the alternative, denying God or building up a nation-state, to escape from the persecution and the death. But this alternative means the ruin of Judaism for Horkheimer.

(INOUE, Jun'ichi 本学部教授)